

植物 防疫 講座

病害編-41

カンキツ病害の発生生態と防除

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 **とみ** **むら** **けん** **た**
果樹茶業研究部門 カンキツ研究領域

はじめに

カンキツはミカン科 (Rutaceae) 植物に含まれ、本科は 1,600 種以上の約 60 属より構成される非常に多様な植物であるとともに、熱帯および亜熱帯地域に適応した常緑果樹である。

我が国でカンキツに発生する病害として、日本植物病名目録 (日本植物病理学会, 2021) には 66 の病名が記載されている。これら病害を糸状菌、細菌およびウイルス・ウイロイドの病原体ごとに分けてみると、糸状菌が 48 (約 7 割) と大半を占め、細菌で 5 種、ウイルス・ウイロイドで 13 種という内訳になる。その中でもカンキツに発生する細菌病が糸状菌病に比べ数が少ないにもかかわらず、古くからカンキツを栽培するうえで最も問題となっているカンキツかいよう病、さらには近年になり一部地域で問題となり、かつ世界中のカンキツ産業に脅威を与えているカンキツグリーニング病は細菌による病害である。本稿では、カンキツに発生する病害のうち、主要なカンキツ病害に関する伝染方法および発生生態の点から以下に解説する。

I 糸状菌によるカンキツ病害

1 黒点病 (*Diaporthe citri*)

本病の伝染源は、樹上の枯れ枝や園内に放置されたせん定枝である。枯れ枝などに形成された胞子は、降雨によって流出し、さらに風雨により周囲に飛散し葉や果実等に感染することから、枯れ枝の除去やせん定枝等を園外に持ち出すことが重要である。幼木では黒点病が見られないのに対し、古い樹ほど被害が多いことが知られている。枯れ枝の発生が多い老木については品種更新することも有効である。日照の悪い園地では降雨後の雨露が乾きにくい条件となり発病を助長するので、特にこのような園では枯れ枝除去をはじめとした耕種的防除に力を

置くことで、本病の病原菌密度を低減することができる。

本病は、梅雨期 (初期感染) および秋雨期 (後期感染) が主な感染時期であり、とりわけ果実は幼果期から成熟期の長期間にわたり発病するリスクがある。佐々木 (1965) によれば、初期感染型の果実の黒点状の病徴は、黒点が比較的大きく、果皮の表面に突出した黒点の周囲に白いふちどりが認められ、黒点の表面が粗造である (図-1)。さらに黒点病の症状が激化した涙斑状もしくは泥塊状の病徴では、病斑部がやや隆起し、果実表面に不規則な亀裂を生じ、その亀裂には白いふちどりが見られるのが初期感染型の特徴である。さらに後期感染型の果実の黒点状の病徴は、黒点が比較的小さく果面に突出せず、黒点の周囲には初期感染で観察される白いふちどりが見られない (図-2)。果実が着色してきても黒点の周りが緑色に残る。後期感染型の涙斑状もしくは泥塊状の



図-1 果実における黒点病 (初期感染型)



図-2 果実における黒点病 (後期感染型)

Epidemiology and Control of Citrus Diseases. By Kenta TOMIMURA

(キーワード: カンキツ, 糸状菌, 細菌, ウイルス, 発生生態, 防除)